

「キリストにつながって」
ヨハネによる福音書 15 章 1-10 節

イエスさまは、ご自身のことを「わたしはまことのぶどうの木」と言われます。そもそも、聖書において「ぶどうの木」とは、どんな意味を持つのでしょうか。

旧約聖書において、「ぶどうの木」というのは、イスラエルの民を示す象徴として使われています。詩編 80 編では、「あなたはぶどうの木をエジプトから移し／多くの民を追い出して、これを植えられました。」(80:9)と歌われています。神さまは、ぶどうの木であるイスラエルの民をエジプトから解放して、約束の地へと導き、そこにぶどうの木のように植えられたのです。それで彼らは根を深く張り、全地に増え広がることができました。しかし、そのようにして豊かになると、次第に神さまの恵みを忘れ、この世と妥協し、神さまから離れてしまいました。

そのことを嘆かれた神さまは、預言者イザヤを通して、このように言われます。「わたしの愛する者は、肥沃な丘に／ぶどう畑を持っていた。よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り／良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。」(イザヤ 5:1-2)

ぶどう畑の主人である神さまは、愛する者のために良いぶどうを植え、丁寧に世話をされたにもかかわらず、そこで実ったのは、すっぱいぶどうでした。神さまの特別な憐れみと選びによって神の民とされながら、ぶどうの木であるイスラエルの民は、罪に支配され、良い実を結んでいないという事態が生じたのです。

それゆえ、預言者エゼキエルはこう告げます。「このぶどうの木は／枝を伸ばし、実を結ぶ／立派なぶどうの木となるように／水の豊かなよい地に植えられていた。語れ。主なる神はこう言われる。このぶどうの木は成長するだろうか。その根は引き抜かれ／実はもぎ取られないだろうか。芽生えた葉はすべてしおれてしまわないだろうか。それはしおれてしまう。それを根から引き抜くのに／大きな力も、多くの人も必要としない。」(エゼキエル 17:8-9)

神さまに信頼することをせず、滅びの道を進もうとしてしまった結果、イスラエルはバビロンに滅ぼされてしまいます。神さまが植えられた神の民であるぶどうの木は、抜き取られてしまったのです。

しかし、それでも神さまは、人間を見捨てられることはありませんでした。神さまは、この地に新たにぶどうの木を植えてくださったのです。それがイエス・キリストです。この「まことのぶどうの木」であるイエス・キリストは、かつてのぶどうの木であったイスラエルのように、途中で抜き取られてしまうような木でも、すっぱい実しかつけないような木でもありません。私たちが永遠の命につながる祝福の源として、私たちに豊かな実りをもたらし、私たちから離れることなく共に生きてくださるのです。

そのイエスさまは「わたしにつながっていなさい」と言われます。では、私たちは、どのようにしてイエスさまと繋がれるのでしょうか。

植物の栽培方法の一つに接ぎ木があります。私たちは、主イエス・キリストというまことのぶどうの木に接ぎ木されたのです。私たちは、元々すっぱい実しかならないような木に生

えていた枝でした。それを農夫である神さまが接ぎ木してくださったのです。けれども、接ぎ木をするには、その土台となる木に切れ目を入れて枝を差し込まなければなりません。木の方は傷を負わなければならないのです。この傷こそ、主イエス・キリストの十字架です。私たちをご自身とつなげてくださるためにキリストは傷を負ってくださったのです。私たちを新しい命に生きる者とするために、キリストは自ら十字架の贖いとなってくださったのです。

本来であれば、外に投げ捨てられ、火に投げ入れられて焼かれてしまう、私たちはそんな枝でした。しかし、そんな私たちをイエスさまはご自分につながるものとしてくださいました。そして、私たちを「清い」ものとしてくださったのです。3節には「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。」とありますが、ここで使われている「清い」という言葉は、じつはその前の2節にある「手入れをする」という言葉と同じ言葉です。つまり、私たちはもう既に、まことの農夫である神さまが、豊かに実を結ぶようにと手入れをしてくださる「実を結ぶ」枝とされているのです。私たちの将来には、約束された確かな希望があるのです。

神さまは、これほどまでに私たちのことを愛しておられるのです。イエス・キリストの十字架と復活の出来事によって、私たちの罪を赦し、私たちを清いものとしてくださっているのです。私たちは、そのような神の愛を受けているのです。その愛を知り、その愛に留まること。それが、まことのぶどうの木につながるということです。